

P-30

下等脊椎動物の腺性脳下垂体における血管内皮増殖因子(VEGF)様物質の免疫細胞化学的検索

嵯峨 堅、吉塚光明

久留米大・医・第1解剖

血管内皮増殖因子(VEGF)は、血管内皮細胞に作用し、その増殖を促すと共に、血管透過性を促進する因子としても知られている。このVEGFは、ラットにおいて従来知られていた肺や腎臓などの器官の他に、内分泌系に広範囲に分布することが報告されている。しかし、下等脊椎動物ではVEGFの存在が明らかではなく、特に腺性脳下垂体における検索はなされていない。そこで、演者らは、数種の爬虫類、両生類、硬骨魚類の成体を材料とし、腺性脳下垂体におけるVEGF産生細胞と腺性脳下垂体ホルモン産生細胞の分布を免疫細胞化学的に検索した。その結果、一部の種の腺性脳下垂体内にVEGF抗体に陽性反応を示す細胞が認められた。今回は、これらVEGF陽性細胞と演者らが今までに検索してきた腺性脳下垂体ホルモン産生細胞との関連を比較・検討する。

P-31

ヒト胎児におけるbFGFの産生とその分布・局在

根本則道¹、鹿 巍¹、中村仁美¹、早川智²、千島史尚²

¹日大・医・第二病理、²同産婦人科

〔目的〕 bFGF(basic Fibroblast Growth Factor)は、自己分泌的ならびに傍分泌的に腫瘍の増殖・進展に重要な役割を担うばかりでなく、胚発生や組織の形態形成に必須の増殖因子の一つである。今回は、ヒト胎児期における形態形成に関するbFGFの役割を明らかにすることを目的として、その発現ならびに分布・局在を主として免疫組織化学的に検討した。〔方法〕 在胎週齢9週-11週のヒト胎児2例を研究対象とし、20%ホルマリン固定後、全割しパラフィン包埋した。bFGFの分布・局在はLSAB法により免疫組織化学的方法によった。〔結果〕 bFGFタンパクの免疫組織化学的局在は、脈絡叢内皮細胞、表皮基底膜、軟骨周囲細胞、腸間膜ならびに腸管粘膜固有層の間葉細胞および肝細胞に認められ、bFGF産生が示唆された。とりわけ、肝細胞においてはびまん性かつ強い染色性が確認された。他の部位においては有意な染色性は確認されなかった。〔結語〕 胎芽期から胎児期への移行期に相当するヒト胎児においてはbFGFの主たる産生部位は肝細胞と考えられた。